

論題	梶山貝塚出土の貝刃について
著者	神沢勇一・川口徳治朗
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— (神奈川県立博物館研究報告) 第2号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1969 年 (昭和 44 年) 3 月
判型	JIS-B5 (182mm × 257mm)

梶山貝塚出土の貝刃について

On the Shell Blades found at KAJIYAMA SHELL MOUNDS

神 沢 勇 一 ・ 川 口 徳 治 朗

Yūichi Kanzawa ・ Tokujirō Kawaguchi

1

1967年、本館で梶山貝塚（横浜市鶴見区上末吉町所在）の発掘調査を行なったさい、花積下層式土器に伴って、貝刃 101 個が出土した。

貝刃の存在が明らかになったのは1950年ころからで、比較的新しいが、現在までに資料はかなり増加し、出土遺跡数も20個所をこえ、また、その機能、性格についても二、三の見解の提示や分類が試みられている。

しかしながら、それらの出土状態は遺跡別にすると、数個から十数個程度の場合が多く、50個以上が一括出土した例はあまりない。この傾向は絶対数が少ない場合もあるであろうが、発掘面積の多少や、発掘のさいに単なる貝殻と識別しにくいこと、また一方において100個をこえる出土例が存在することなどを考慮すれば、必ずしも事実を反映するものと断定することはできないであろう。したがって、貝刃のあり方を解明するには、諸遺跡の出土例の検討もさることながら、現在のところでは一遺跡から出土した多量の資料の分析が、むしろ必要と考えられる。梶山貝塚出土例は、その意味で良好な条件を備えているので、検討を加え、所見を報告することにした。

2

資料総数 101 個のうち、完形品および器形を察知しうるものは84例である。貝の種類別では、ハマグリ=94 (93.0%)、カガミガイ=5 (4.9%)、オキシジミ=2 (1.9%)となっており、ハマグリが圧倒的多数を占めている。なお、チョウセンハマグリの疑いのあるものが数例存在するが、現状においては確実に識別できないので、やむをえずハマグリの中に含めた。チョウセンハマグリはハマグリと同一種に属し、形状も酷似しており、貝刃の素材としては、たとえ同一に扱ったとしても、大差がないと考えられる。

貝刃に使用された殻の種類は、「表 1」に示したとおりで、腹縁を手前にし殻を伏せた場合、前背縁が左側になるものが66%を占める。この傾向は貝の種類別およびあとに述べる貝刃の各群においても認められる(表 2)。なお以下の記載では、殻の種類を表示するさい、便宜上、腹縁を手前にして殻を伏せたとき、前背縁が左側になるものに L、右側になるものに R の記号を使用することにした。

貝の大きさは、カガミガイとオキシジミではいずれも中型の殻を使用している（ただし、例数が少ない点を考慮しなければならないであろう）。ハマグリの場合は長さ 6 cm 前後から 9 cm 前後までの殻を使用しているが、7～8 cm 程度の中型の殻が最も多い。貝刃の器形と殻の大きさの関係は、3 群において小型の殻が使用されないことを除けば、特に注意すべき点は認められない。

3

資料は刃の位置および幅によって、3 群 6 類に区分することができる。

1 群・腹縁の一端に寄って刃を付けたもの。

総数 17 例。すべてハマグリを使用し、腹縁に剝離を加えて直接刃を付けている。本群は刃の幅によって a, b 2 類に細分される。

a 類 〈挿図-4, 図版 1-13〉

腹縁の一端に 2～3 回の剝離を加え、幅 2.5～3 cm 程度の狭い刃を付けたものである（7 例）。殻の種別個数は L 4 例、R 3 例で、刃の位置は「表 2」に示すように、L, R のいずれにおいても、後背縁側にあるものが普通らしく、7 例中 6 例を占める（以下、各群における殻の種別と刃の位置関係については「表 2」を参照されたい）。

b 類 〈挿図-2〉

刃の幅が a 類よりも広く、腹縁の一端から中央部に及ぶものである（10 例）。殻の種別個数は L 6 例、R 4 例で、刃の位置は、R のうち 1 例を除き、後背縁寄りにある。

2 群・腹縁のほぼ中央を中心に刃を付けたもの。

総数 53 例。腹縁に剝離を加えて、直接刃を付けている。貝の種類はハマグリ 46, カガミガイ 5, オキシジミ 2 である。本群も刃の広狭によって、a, b 2 類に細分される。

a 類 〈挿図-1, 3, 5, 11, 12, 図版 1-3, 同 2-1, 5〉

腹縁中央の一部に 3 回前後の剝離を加え、幅 2～3 cm 程度の狭い刃を付けたものである（21 例）。貝の種類はハマグリ 14, カガミガイ 5, オキシジミ 2 となっているが、刃の付け方に本質的な相違はない。ただ、小型のハマグリを使用したものの中に、1 cm 前後の刃をいくぶん間隔をおいて、腹縁の 3 個所に付けたものが 1 例見られる。ハマグリ製のものには、資料 1 のように小型の殻を使用した例と、長さ 9 cm をこえる大型の殻を使用した例とがあるが、両者の中間を占めるものをも含めて、数がほぼ平均しており、使用痕にも差を認めがたいので、殻の大小は特別な意味を持たないと考えられる。殻の種別個数は、ハマグリでは L 9 例、R 5 例、カガミガイでは L 4 例、R 1 例、オキシジミでは L の例を欠き、R 2 例となっている。

b 類 〈挿図-6, 7, 8, 図版 1-14, 6, 同 2-16〉

腹縁のほとんど全体に剝離を加えて、広い刃を付けたものである（32 例）。本類の中には資料 8 のように、腹縁末端に末加工部分を多く残し、1 群 b 類との類似を示す例が少数認められる。また資料 16（図版 2-16）は殻の中央に穿孔した特殊な例である。穿孔は殻の内側から行なわれ、直径 1.9 cm, 短径 0.9 cm で、周囲の器面には穿孔の目的を示す痕跡は見られない。なお、穿孔された例は本例だけである。

本類ではすべてハマグリを使用し、殻の大きさは小型から大型まで幅をもっているが、中型の殻を使用した例がわずかながら多い。殻の種別個数はL22例、R10例である。

3 群・腹縁を大きく打ち欠いた部分に刃を付けたもの。

総数14例。殻の一部を打ち欠いた部分に刃を付けるのは1、2群とまったく異なる点である。基本的形状のみならず、使用によって生ずる「刃こぼれ」が見られないので破損品とみなされやすいが、刃の一部が相当に磨滅し、細い傷痕が多数認められる。本群は打ち欠きの状態によって、a、b2類に細分できる。いずれにおいても、中型および大型のハマグリを使用している。

a類 〈挿図-9, 10, 図版1-9, 15〉

殻の左右両側から大きな打ち欠きを数回加え、不要部分を除去した残部を素材としたものの(10例)。

平面形がほぼ菱形を呈する例(10)と後背縁側がより大きく打ち欠かれ、縦長の平行四辺形に似た例とがある。前背縁寄りに、幅の狭い刃を付ける傾向があるらしい。殻の種別個数はL7例、R3例である。なお10は1群b類または2群b類の破損品を再生したものらしく、もとの刃を一部分残している。

b類 〈挿図-9, 図版1-9〉

殻の周辺をだいたい平均に打ち欠き、不要部分を除去した残部を素材としたもの(4例)。打ち欠きの大きさはa類よりも小さい。平面形は丸味をもち、腹縁に相当する部分に刃を付けている。殻の種別個数はL2例、R2例である。

4

貝刃の機能と密接に関係する、刃および使用痕についての所見は次のとおりである。

刃は2次加工の有無によって2類に区分できる。なお、細部の調査と測定には、倍率10倍のScale Lupeを使用した。

1類 2次加工を行なわないもの。

幅1~1.2cm前後の剝離を連続的に加え、剝離によって生じた縁をそのまま刃先としている。刃先は厚く、鈍い。刃の平面形は、剝離の接する部分が突出するため波状になる。なお、刃先の奥行きはわずかであるが、刃先から3~6mm上の部分まで殻の表面がそげ落ち、末端が刃の部分と同様に波状になっている例がきわめて多い(3, 9~13)。

2類 2次加工を行なうもの。

腹縁に1類と同様な剝離を行なったのち、さらに2次加工として、こまかな剝離を加え、刃先を薄く鋭利にしている。刃の平面形は1類より整っているが、部分的に1次加工の痕跡が認められる。

2次加工には、幅2~4mm程度の不そろいな剝離を加えたものと、幅5~6mmの、幅に比較して奥行きが深い剝離を並行して加えたものがある。前者は1, 6, 8, 14, 16にみられ、使用による刃こぼれとは明らかに異なる。後者は押圧剝離(pressur-flaking)によるものと思われる(5, 7)。とくに5のそれは典型的な例であるが、1次加工の剝離の痕跡や、殻の表面は末端に生じた波状の剝落部分をこえる場合が多く、1次加工として

行なわれたように誤認されやすい。

器形と刃の種類の関係について、破損品および刃部の保存状態が不良で確実性を欠く29例を除き、70例を調査した結果は「表3」のようになる。

1類と2類の割合は、単純集計では70例中、1類32例(45.7%)、2類38例(54.3%)で大差はないが、刃幅との関係ではかなり目立った傾向が認められる。

すなわち、(1)刃幅が狭い貝刃(1群a類、2群a類、3群a類、同b類)では、1類が2群a類を除く各類の全部を占め、全体としては31例中25例(78.1%)を示し、(2)刃幅がやや広い貝刃(1群b類)では、13例中1類7例、2類6例で同程度となり、(3)刃幅が広い貝刃(2群b類)では、2類が26例の全部を占めている。なお、1群b類と2群a類で2類の刃をもつ例は、いずれもその中では刃幅が広く、刃の位置および大きさによって2群b類と区別されるが、あまり差のないものである。したがって、幅の狭い刃を付ける場合には粗い剝離だけを行い、幅の広い刃を付ける場合には更に2次加工を施すのが原則のように考えられる。

また、器形別のあり方では、腹縁を打欠いた部分に刃を付けた貝刃(3群)では、刃の位置に関係なく1類に限られる。腹縁に刃を付けた貝刃(1群、2群)の場合は、1群では1類が19例中13例(68.4%)、2群では2類が37例中32例(86.4%)と多数を占める。前に述べたように、1群b類、2群a類のうち、2類の刃が付いた例は刃幅が2群b類に近い点を考え合わせると、刃が腹縁の一端に片寄る場合には1類が、また腹縁の中程をふくんで幅が広い場合には2類が、それぞれ支配的な存在を示すといえる。

これらの2点から貝刃の器形と刃の種類、幅および位置の間には、ある程度一定した組合せの存在することが認められよう。

使用痕については、破損した17例を除く84例中67例に、幅0.1~0.2mmの細い擦痕が認められる。擦痕は主として刃先と刃の上端から器体のなかば付近までの器面に目立ち、とくに後の場合では一部分に集中する傾向があり、また、器面が磨滅していることが多い(図版1-3, 14)。そのほか、刃に接した部分にもかなり残っており(図版2-1)、84例中合計40例に認められる。これらは、貝刃に想定されている搔削の機能を具体的に示すものとして注意したい。

擦痕は一個体では方向が大体一定である。刃に対する擦痕の方向は、器形別にみた場合は特定の傾向を認め難いが、全体としては主体をなす擦痕が右傾した例が約3分の2を占め、ほぼ直角に近い例がこれに次ぎ、左傾した例は少なく、1群と3群の一部に数例みられるに過ぎない。

器形と刃の種類の間にある程度一定の関係があるにもかかわらず、器形ごとに擦痕の差が認められないことは、一見、矛盾しているように考えられる。

しかし、貝刃の使用状態について、一般に考えられるごく自然な状態、つまり右手の拇指を殻の内面に置いて貝刃を握った場合、手の中軸と刃のなす角度は、殻の種類(L, R)、刃の位置、使用角度等の差を加えても、約120°~170°の範囲内にあり、効率の良い運動方向をとる限りでは、背面に刃に対して右傾、またはほぼ直角の擦痕が生ずる可能性が多い。このような基本的条件に器面の保存状態、使用期間の長短による磨滅の相違その

他の観察上の制約が加われば、擦痕の差は明瞭な形で表われにくいと推測される。したがってこの結果だけで、貝刃に単一の用途（搔削具の機能範囲での）を想定するのは危険であろう。たとえば、1類の刃を付けた貝刃には、刃先の突出部よりも内湾部の方が多く磨滅した例がかなりあり、Knoched Scraper 的な用途が伺われるのである。これは器形全体からみても多分に可能性をもっているといえよう。使用の結果としての傷痕より、意識的に付けられた刃の相違に注意したい。

5

以上に述べたところを総合すると、梶山貝塚出土の貝刃は3群6類に分類でき、そのうち(1)腹縁の一端に幅の狭い厚い刃を付けたもの、(2)腹縁に幅の広い鋭利な刃を付けたものの、(3)殻の一部を打欠いた部分に幅の狭い厚い刃を付けたもの、が主要な形として認められ、形態ごとに用途が異なるものと考えられる。

なお、3群6類のうち、1群b類の一部と2群b類は芝崎孝の分類におけるA類に相当するであろう。ただしB類としているものについては、細部加工の具体的規定が示されていないので、対比することができない。

貝刃については、従来 Scraper 的な機能が想定されているが、梶山貝塚出土例の過半数に残る擦痕と磨滅の状態は、この想定を裏付けるとともに、⁽⁸⁾長期間の使用を示している。このことは、形態と製作手法の間に一定の組合せが存在する点とあわせて、貝刃が単に一時的な使用に供されたものではなく、定型した道具として、搔削具の中である程度固定的な位置を占めていたことを意味すると思われる。⁽⁴⁾

註

- (1) 西村正衛「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚―第2・3次調査」早稲田大学教育学部学術研究3号 1954年
- (2) 芝崎孝「貝刃」下総考古学1 1964年
- (3) 「注1」・神沢勇一「横須賀市吉井城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品(2)」横須賀市博物館研究報告(人文科学)7号 1963年
- (4) 西村正衛・金子浩昌「千葉県香取郡鶴崎貝塚」古代35号 1960年

表 1 貝および殻の種別個数

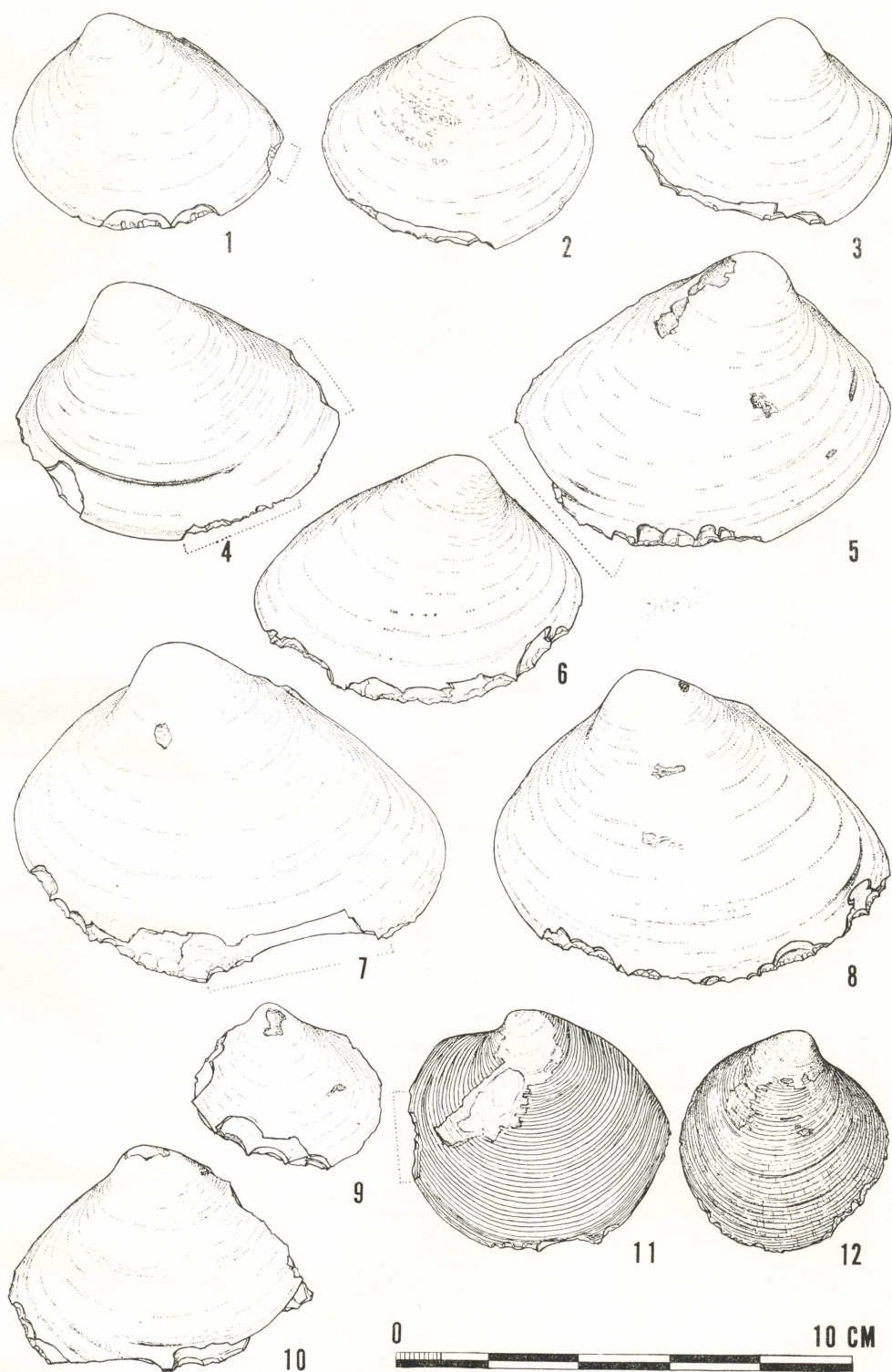
貝種別 \ 殻種別	ハ マ グ リ	カ ガ ミ ガ イ	オ キ シ ジ ミ	合 計
L	62	4	0	66 (65.3%)
R	32	1	2	35 (34.6%)
計	94	5	2	101

表 2 器形および殻の種別個数

貝および殻の種別		ハマグリ	カガミガイ	オキシジミ	類別集計	累 計
器 形 別		(L) (R)	(L) (R)	(L) (R)		
1 群	a 類	7 (4) (3)	0	0	7	17
	b 類	10 (6) (4)	0	0	10	
2 群	a 類	14 (9) (5)	5 (4) (1)	2 (0) (2)	21	53
	b 類	32 (22) (10)	0	0	32	
3 群	a 類	10 (7) (3)	0	0	10	14
	b 類	4 (2) (2)	0	0	4	
そ の 他 (分類不能)		17 (11) (6)	0	0		17
殻 の 種 別 集 計		(62) (32)	(4) (1)	(0) (2)	1 0 1	
累 計		94	5	2		

表 3

刃の種別 \ 器形別	1 群		2 群		3 群		類別集計	累 計
	a 類	b 類	a 類	b 類	a 類	b 類		
1 類	5	7	6	0	10	4	32	70
2 類	1	6	5	26	0	0	38	
類 別 集 計	6	13	11	26	10	4	7 0	
群 別 累 計	19		37		14			



貝刃実測図

.....=欠 損

1 群 a 類= 4

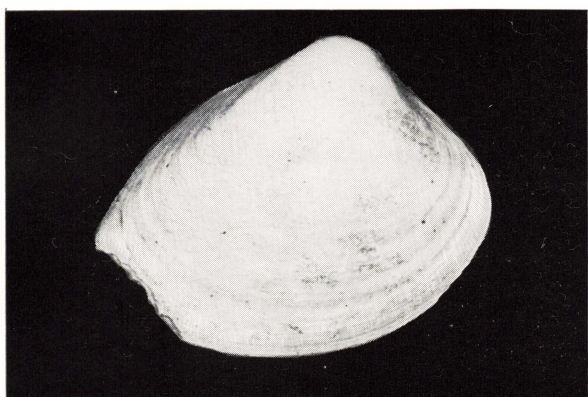
1 群 b 類= 2

2 群 a 類= 1. 3. 5. 11. 12

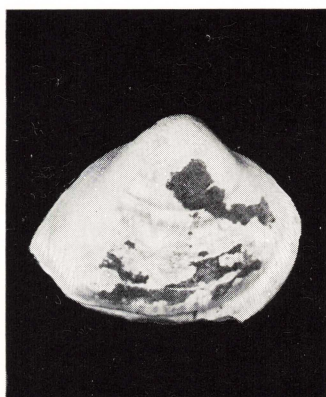
2 群 b 類= 6. 7. 8

3 群 a 類= 9

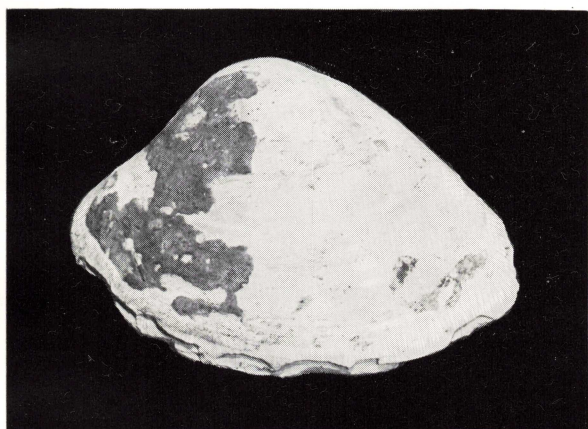
3 群 b 類= 10



13



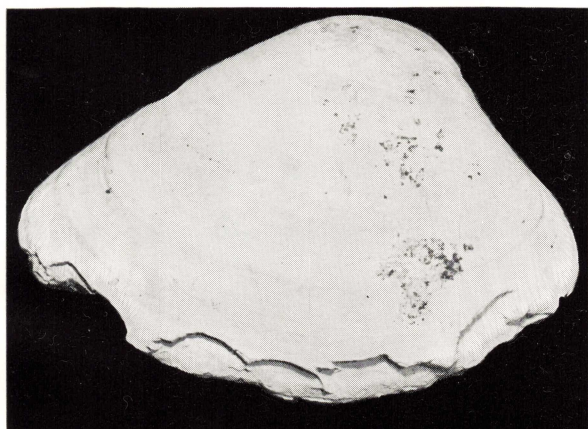
3



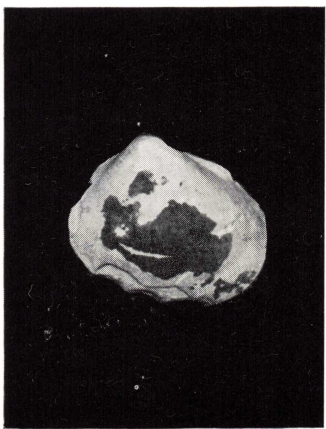
14



15



6



9

貝 刃

13 = 1 群 a 類

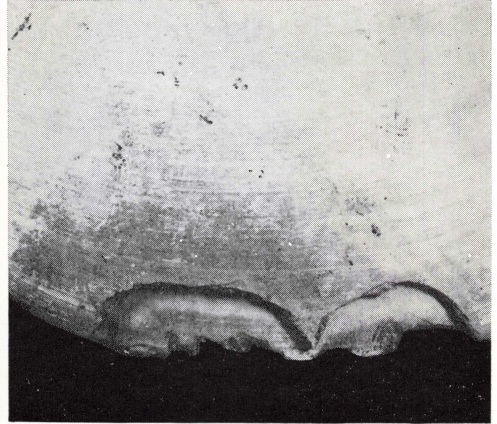
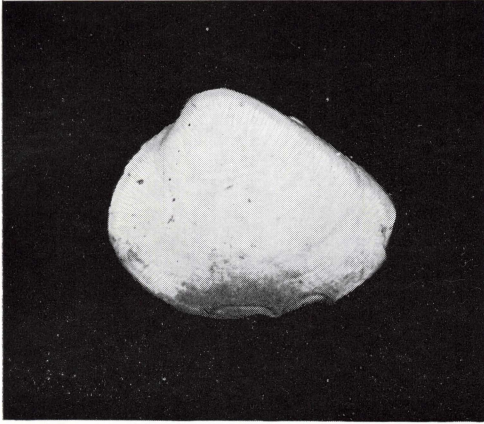
14 = 2 群 b 類

6 = 2 群 b 類

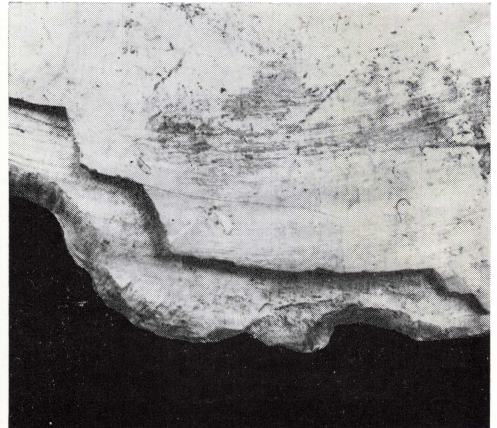
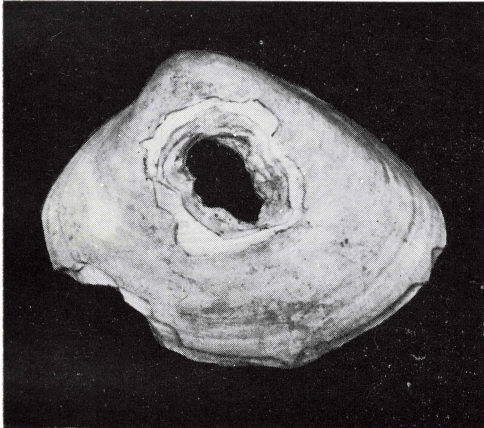
3 = 2 群 a 類

15 = 3 群 b 類

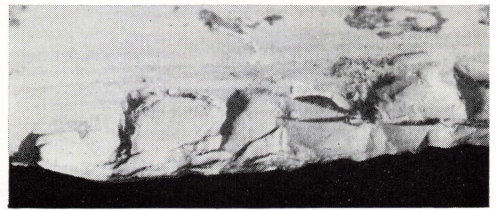
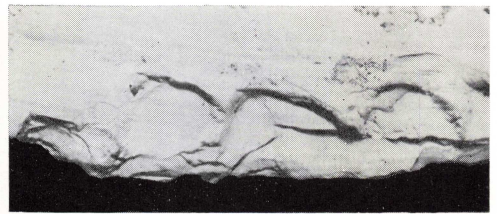
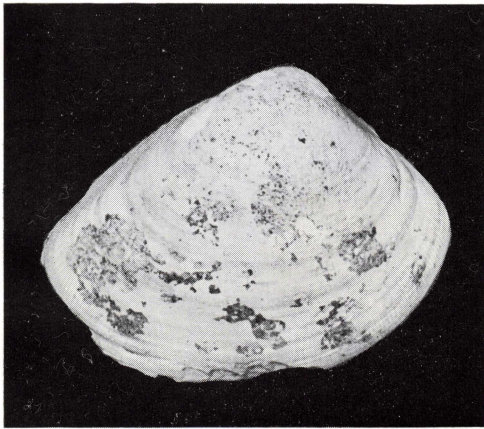
9 = 3 群 a 類



1



16



5

貝 刃 1 = 2 群 a 類 16 = 2 群 b 類 5 = 2 群 a 類